

朝鮮民主主義
人民共和国

奇妙な依頼

ソウル
全州
光州

平尾富雄

Essay

ソウル在住の李範龍氏は、日本の商社に三十年間勤務されたベテランの商社マンであり、若いころ貿易業務を中心にビジネスの指導を受けた私が「師匠」と仰ぐ人物である。

一九九六年、その李氏から奇妙な依頼を受けた。朝鮮半島離散家族の手紙を、日本で中継してほしいというのである。

当時韓国と北朝鮮との間の手紙は、北朝鮮当局の厳しい管制によって無事届く可能性はほとんどないとのことであった。対して日本と韓国の間はもともと問題はなし、日本と北朝鮮との間は不安定ではあるものの何とか届くのだという。私が日本で朝鮮半島からの手紙の中身を取り出して国際郵便用の別の封筒に入れなおし、日本人の私が発信した形で相手方に送ってほしいのだと李氏はいう。

いささか不気味な感じの依頼に一瞬戸惑ったが、「大丈夫ですよ、北朝鮮と日本との間で文通している人は沢山いるのですから」という李氏の言葉に納得し、自宅の住所を中継点として提供することを承諾した。

これに対する李氏からの報酬が洒落っていて、当時韓国語を勉強中であった私の教材として手紙の文面を読んだり、コピーを取っても構わないというものであった。

「私文書ですが構いません、ネイティブの言語に直接触れてごらんさい、韓国語のテキストよりずっと歯ごたえがあるはずですよ」

という李氏の言葉であったが、間もなく直面した手紙の内容は私にはかなり難解で、歯ごたえどころの騒ぎではなかった。

かくして我が家を中継点とした「南北交流」が始まり、赤白青色で縁取りされた国際郵便が頻繁に届くようになった。

李氏との約束通り開封して中身を取り出し、別の封筒に相手の宛先を書いて私を差出人として投函する作業には、新鮮さとともにコピーを取るという後ろめたさの入り混じった奇妙な感覚が残った。

コピーしたものをテキストだと思って翻訳してみると、

練習問題に相当する部分が無数に出て来るが、いずれも難解で、しかもテキストと異なり問題の解答が示されていないので、辞書を片手に理解するのに苦戦続きであった。手書きのハンゲル文字を見るとやはり達筆の人から金釘流の人までさまざまであるが、どちらかというと私には達筆よりも金釘流の方が読みやすかった。

南北の手紙の内容は対照的で、南は落ち着いており、北は悲惨な感じのものが大部分であった。

北からの手紙は、「母上、お目にかかることも叶わず胸のはり裂ける思いでお便り申し上げます」とか、兄から弟へ宛てた「年老いた母は遠くにいるお前のことばかり口にしながら、毎日見えない目から涙を流し続けている」のような悲痛なものがほとんどであったが、「金正日將軍様」を賞讃する言葉が書き添えられていることもしばしばで、この国の社会環境の微妙さを感じさせた。

この頃の北朝鮮は「苦難の行軍」と呼ばれる非常に辛い時代であったが、お金や品物を無心する記述が多く、特に薬品の入手を渴望している様子が痛切に伝わって来た。更には靴下や四度の老眼鏡の所望もあつたりして、さながら終戦直後の日本の物資不足を連想させる内容であった。医師に処方された薬の入手すら困難な経済事情が窺われ、風邪薬や神経痛の薬について薬品名や数量を詳しく書いて「何とか送ってほしい」という請願もあつた。現金や薬品

を南から北へ送るのがどんなルートだったのか、またどの程度届いているのかは不明だが、その後の交信から一度だけ薬品が届いたことへの感謝の返信が確認できた。南からの返信がないことへの不満の便りが連続することもあつたが、差出地の郵便局の消印の日付を見ると、手紙が日本まで届くのに二ヶ月以上かかっている場合もあり、これを知ると由もない発信者の不満は「さもあんなん」の感じであった。

数少ない明るい感じの手紙には、兄から妹への「仁華（妹の名）！ 花雲の立ちのぼる輝かしい新年の朝に、お前の幸せを祝福する」で始まっている例があり、「花雲の立ちのぼる」はこの国の昔の歌謡「駅馬車」の歌詞そのものであることが印象的であった。北の切手には建設、労働、団結などを象徴する絵柄が多い中、飛んでいる蝶を夢中で追っつけた雄鶏が、うっかり崖下の池にはまってしまつて大あわてしているというユーモラスな構図のものもあり、お国柄を考えると意外であった。

李氏の計らいによって「南北交流」の人数もかなり増えてきた一九九七年、中継を始めてから一年半が経過した頃、ソウルの李氏から突然ファクスが届いた。ファクスにはソウルの李氏の知人が一九五〇年の朝鮮戦争以来、四十七年ぶりに北朝鮮にいる二人の息子との文通が出来たと狂喜しているという文字が踊っていた。北からの手紙は、開封し

て先ず李氏あてファクスで送り、そのあと別の封筒で郵送する順序であったが、このとき私はまだコピーの翻訳をしていなかった。そのため私より李氏の方がこの重大な情報の把握が早かったのである。二人の息子からの手紙は別々の住所から発信されていたが、偶然二通とも同じ日に日本に到着していた。急いで翻訳して見ると一通には「父上！突然父上の手紙が届きました。四十七年ぶりです、人生に希望が湧いてきました」とあり、もう一通には「父上！手紙を受け取ることができたのは奇跡です。皆さんのご無事を知り、早く会いたい気持ちでいっぱいです」と書かれていたが、老母の状況を伝えたり葉の無心をしたりの手書面の緊迫感にくらべると、四十七年ぶりのサブライズにしては文面の覇気が乏しく感じられた。勝手な推察ではあるが、このような喜びの場面では感情を100%表現するわけに行かない何らかの事情を窺わせる文章であった。

二〇〇〇年、金大中大統領、金正日総書記の指揮により行なわれた第一回の南北離散家族会談の折、この親子は幸運にも五十年ぶりの再会を果たすことが出来たと言う。南北それぞれ一〇〇名が相互訪問した離散家族会談のメンバーに、どのようにしてこの親子が選抜されたのかは不明だが、南北レターの中継がこれほど素晴らしい展開を見せようとは思ってもみなかった。これとは別に、北からソウ

「朴さんの精一杯の感謝の印ですよ！受け取って下さい」

一目で手造りとわかる大量のメンタイコを差し出す朴氏は涙を流し続けており、これを私に渡すことを唯一の目的として来日した素朴な老人の醸し出す、如何なる言葉にも勝る無言の迫力に、戦慄にも似た感動を覚えた。これは、自分の行為がこれほどまでに人に喜ばれたという感激を、身震いとともに実感した瞬間でもあった。

朴氏とは結局最後まで会話にはならず李氏の、「お互いの心は通じ合ったと思いますからこのへんで……」の言葉に促されるように、朴氏とお別れの握手を交してホテルを辞した。朴氏の感謝の気持ちが見事に凝縮された10キロを越えるメンタイコはずしりと重く、その後長い間我が家の食卓を賑わした。

二〇〇五年、九十歳の天寿を全うされた李氏の永眠を境に、ソウルの中継拠点は事実上その機能が失われ、約十年間続いた「南北交流」は、その後一年を経ずして潮が引くように自然消滅してしまった。

数えきれないほどのハンゲルによる両国文化の学習の機会と、強烈な感動の体験をもたらしてくれた李範龍氏の「奇妙な依頼」は、かくして終焉を迎えた。

ルまで来た息子の母親が、重病で入院のため面会場所のホテルに来ることが出来ず、一度は面会を断念したが、南北赤十字社の特別な配慮により息子を救急車で病院まで移送し、短時間ではあるが母子の面会が果たせたという美談も報じられた。

この年の暮れ、来日した李氏に呼ばれて品川のホテルへ出向いたところ、李氏の傍らに見知らぬ老人が立っている。李氏によると先般の離散家族会談のとき、五十年ぶりに息子達と再会できた父親本人であるという。「彼はもう高齢だし、口下手でうまくしゃべれないというので、私が代弁します」と李氏は続ける。「手紙を中継してもらったおかげで五十年ぶりに息子達との再会ができたことを、彼は」とつともなく喜んでいいるのです。そしてどうしても直接会ってお礼が言いたいというので連れて来ました。日本語はわかりませんから、どうぞ日本語で話してやって下さい」朴東烈と名乗るこの老人は、とうに八十歳を越えていると見られる風貌であったが、こちらから話しかけた途端に大粒の涙を流し始めた。そして前の机に手をついたまま、黙って何度でも何度も頭を下げ続けるだけであった。もはやこの場に言葉は必要なく、ただ感極まった「沈黙」の時間が流れた。暫時の後、朴氏がおずおずと差し出したのは、古い石油缶一杯につまったメンタイコであった。李氏は言う。

受賞の言葉

平尾富雄

ビジネスの師匠から受けた奇妙な依頼が、その後思いもよらぬ方向へと発展していった。北朝鮮と韓国との間の手紙を日本の自宅を拠点として中継することが、南北離散家族の会談の実現に一役買おうなどは夢想だにできなかった。このような意外な展開の模様をきちんと記録に残しておきたいと考えていたが、今回の応募をきっかけにエッセイとしてまとめることができた。

応募という絶好の機会を与えて下さった文芸思潮誌と、発表の場を作って下さった選考委員の先生方をはじめ関係者の皆様に、心から感謝の意を表したい。



平尾富雄

平尾富雄

1936 鳥取県生まれ
1937-46 旧満洲国在住
46 引揚げ
1954 鳥取工業高校卒業
54-95 富士電機(株)技術部門勤務
95 - 2004 丸紅(株)電算、研修センター勤務
2005 (株)玉木製作所社長